

# 権威主義的性格研究の現代的意義

## ——質的調査の検討を通して——

東洋大学大学院 菅原想

### 1. 目的

本報告の目的は、権威主義的性格研究における質的調査の有効性を検討することで、この研究のもつ現代的意義を明らかにすることにある。昨今の日本社会における他者非難的な諸現象（特定の属性をもつ人々に対する非難など）を鑑みるに、分析視角としての権威主義的性格研究の意義は高まりつつあるように感じられる。現に『権威主義的パーソナリティ』（T.W. アドルノら）では、こうした観点を含めて、質的調査に基づき多角的な分析がなされている。一方、日本の研究では量的調査がその中心を占めており、そこでは主に「権威に対する服従性」という観点から権威主義者が捉えられてきた。しかし、こうした捉え方では権威主義的性格の現代性が十分にはみえてこない。質的調査を改めて実施することで、量的調査では捉え切れなかったこの性格傾向のより詳細な分析が可能となることを示し、権威主義的性格研究の現代的意義を明らかにしたい。

### 2. 方法

質的調査の有効性を検討するため、少人数グループによる対話の分析を行なった。専門学校生を対象に、事前に測定したF尺度（アドルノらの用いたファシズム尺度）の得点に基づいて高得点者と低得点者を二つのグループに分け、そのグループ内の対話において何が話されたか、どのように対話が展開したか、対話の前後でどのような意見の変化がみられたかといった観点から、その傾向を比較した。対話の題材としては、ジレンマ課題と量刑判断を用いた。ジレンマ課題には、妻の病を治すために薬を盗んだ夫ハインツの行為の是非を問うハインツのジレンマを用いた。量刑判断については、殺人事件に関する架空のシナリオを提示し、適当だと思う刑罰を各自に示してもらった後、グループとして一つの刑罰を対話によって導き出すよう求めた。

### 3. 結果

ジレンマ課題については、ハインツの行為を支持するか否かの根拠として、高得点グループでは「秩序の維持」、低得点グループでは「生活者に対する配慮」が読み取れた。具体的には、支持しない根拠として、高得点グループでは盗むという行為の違法性に対する言及がみられ、低得点グループでは薬を盗まれた側の生活を心配する発言がみられた。

量刑判断については、高得点グループでは「加害者が社会に与える悪影響」、低得点グループでは「加害者に対する社会の責任」についての指摘がみられた。各自の量刑判断においては、低得点グループの方が重い刑罰を選んだが、対話の過程で意見の変化が生じた。一方、高得点グループでは対話の前後で意見の変化があまりみられなかった。具体的には、低得点グループでは加害者の行為を解釈しようとする発言がみられ、そこから加害者のおかれた境遇へと対話が展開していき、最終的に一致する刑罰を導き出すに至ったが、高得点グループでは現実的な量刑判断と理想論が平行線を辿り、最後まで一致することはなかった。

### 4. 結論

質的調査の実施により、「権威に対する服従性」とは直接関連しない事柄（他者の行為に対する認識や対話における態度など）に関して一定の傾向が確認された。これらの傾向は、他者非難的な諸現象との関連をも示唆するものであり、現代においても十分に検討の意義がある。今回の結果から何らかの一般的な見解を引き出すことはできないが、権威主義的性格研究の現代的意義の一端は示し得たのではないかと考えている。